

吟味されることのない 人生など生きるに値しない ソクラテス (紀元前 469 年～前 399 年)

その哲学的背景

部門
認識論

手法
問答法

前史

紀元前 600 年ころ～前 450 年 イオニアとイタリアにおいて、ソクラテス以前の哲学者たちが、宇宙の本性の探究を開始する。

紀元前 5 世紀初頭 パルメニデスが、私たちは推論を介してしか宇宙を理解しえないと主張する。

450 年ころ プロタゴラスとソフィストたちが、弁論術を哲学的問いかけに応用する。

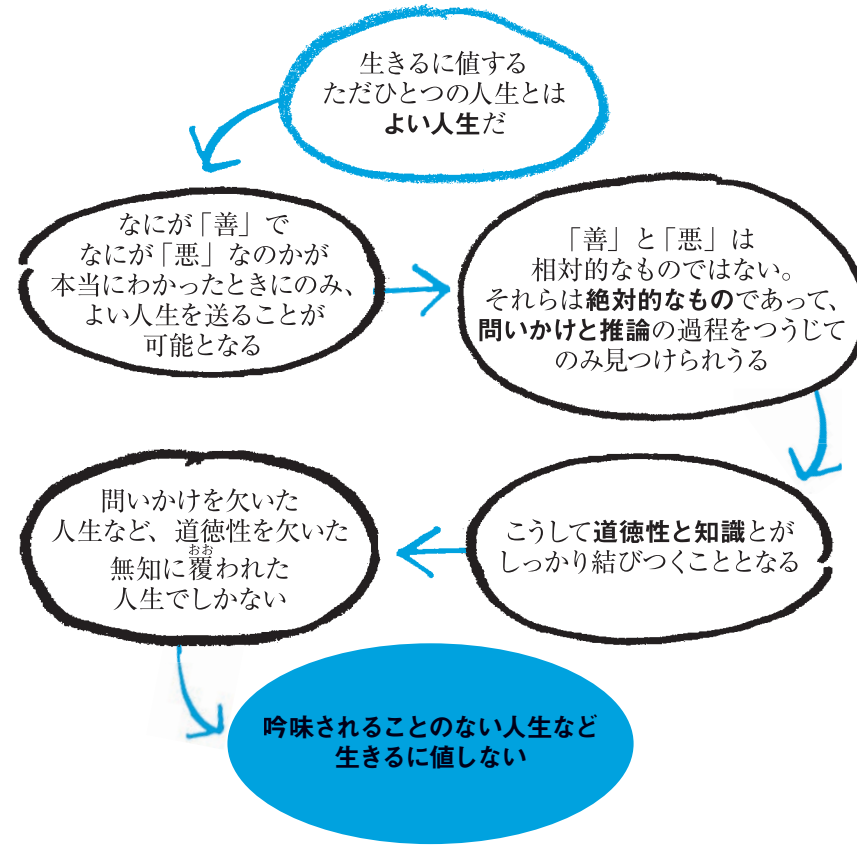
後史

紀元前 399 年～前 355 年 プラトンが、『ソクラテスの弁明』をはじめとする幾多の対話篇において、ソクラテスのひととなりを描きだす。

紀元前 4 世紀 アリストテレスが、ソクラテスの手法にたいするみずからの恩義を認める。

ソクラテスは、しばしば西洋哲学の創設者のひとりとみなされるが、自分ではなにひとつ書きのこさなかったし、学派もつくらず、自分固有の理論ももたなかった。ソクラテスがおこなったのは、一貫して自分に関心のある問題について問うことであり、そのなかで彼は、新しい思考方法を展開し、私たちが考えることについての新しい吟味の方法を展開した。それがソクラテスの手法ないし問答法と長らく呼ばれているものだが(「問答」と呼ばれるのは、それが対立する意見のあいだでの対話として進められるからだ)、これによってソクラテスは祖国アテナイに多くの敵をつくった。彼は、ソフィストにすぎない(欺くことだけを目的に議論をする輩)と貶められ、伝統にそぐ

参照 ミレトスのタレス 22～23 頁 ■ ビュタゴラス 26～29 頁 ■ ヘラクレイトス 40 頁 ■ パルメニデス 41 頁 ■ プロタゴラス 42～43 頁 ■ プラトン 50～55 頁 ■ アリストテレス 56～63 頁



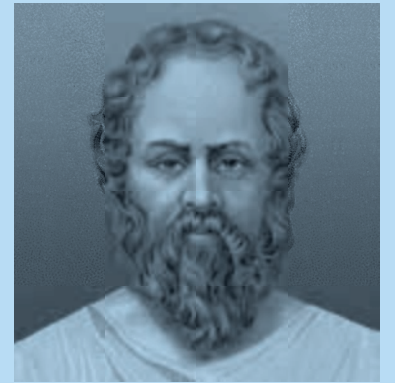
わない思想で若者たちを墮落させたという罪で死刑にされた。だがソクラテスは、多くの後継者にも恵まれた。そのなかに、ソクラテスの考えを「対話篇」と呼ばれる一連の著作に記録したプラトンがいる。そこに描かれたソクラテスは、つねに観念の吟味に着手している。ソクラテスの思想がそっくりこんにちまで伝えられ、西洋哲学の流れを領導しているのは、主としてこれらの対話篇——そこには、『ソクラテスの弁明』『パイロス』『饗宴』といった著作がふくまれる——のおかげだ。

人生の目的

紀元前 5 世紀後半のアテネで暮らしたソクラテスは、若いころは自然哲学を研究し、宇宙の本性にかんするさまざまな説明

を吟味したらしい。だが、その後ポリスの政治にかかわり、正義の本質といった、もっと地に足のついた倫理的問題に関心を傾注した。それでいて、議論に勝利することや金儲けのために議論することには、まったく興味をもたず、同時代人と同程度の謝礼すら受けとらなかった。ソクラテスは解答や説明を求めることもなかった——ただ、私たちがみずからに適用しているさまざまな概念(「よい」や「悪い」、「正しい」といった)の土台を吟味するだけであった。なぜなら、ソクラテスの考えでは、自分たちがなにものであるかを理解することこそが哲学の第一の課題だからだ。

このように、ソクラテスは、主として生きかたの検討に関心を向けたが、自分の周りに敵を増やしたのも、人びとのもっとも



ソクラテス

ソクラテスは、紀元前 469 年にアテナイの石工と助産師のあいだに生まれた。ソクラテスが父親の仕事を継いだというのはありそうなことだし、哲学を学んだのはおそらく兵役につく前のことだったと推測される。ペロポネソス戦争での活躍によって有名になったのち、アテナイにもどり、しばらくは政治に携わったらしい。だが、父親が亡くなり、働かなくとも妻クサンチッペと暮らしてゆくのには十分なだけの遺産を相続した。

ソクラテスがアテナイの街中でよく見かけられる存在になったのは、これ以降のことだ。アテナイの同胞たちと哲学的議論を繰りひろげては、若い信奉者たちを獲得していった。最後にソクラテスは、アテナイの若者の心を惑わしたという罪で告訴され、死刑を宣告された。脱獄の機会を提供されたにもかかわらず、有罪の評決を受けいれ、毒ニンジンの杯をあおって紀元前 399 年に亡くなった。

主著

紀元前4世紀～前3世紀

プラトンによって『ソクラテスの弁明』に書きとめられたソクラテスの生涯と哲学、および幾多の対話篇がある。



その哲学的背景

部門
科学哲学

手法
経験主義

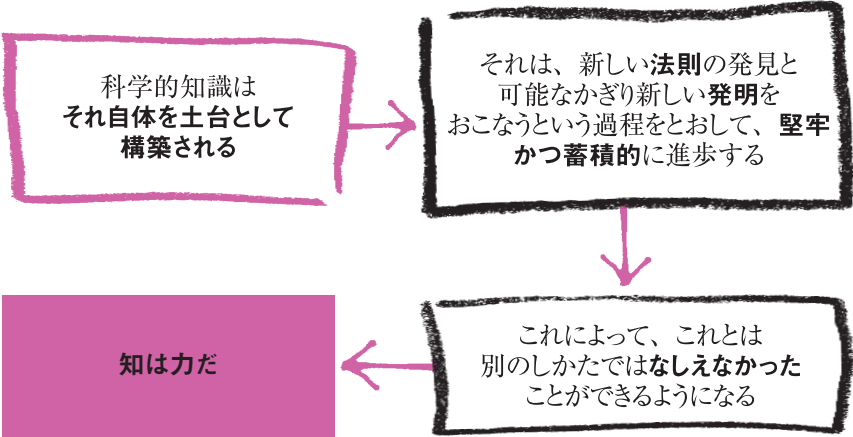
前史
紀元前 4 世紀 アリストテレスが、観察と帰納的推論を科学的思考の中核にすえる。
13 世紀 イギリスの学者ロバート・グロステストとロジャー・ベーコンが、アリストテレスによる科学的知識への帰納的アプローチに実験作業を追加する。
後史
1739 年 デイヴィド・ヒュームの『人間本性論』が、帰納的思考の合理性に異を唱える議論を展開する。
1843 年 ジョン・スチュアート・ミルの『論理学体系』が、全部があわさって諸科学を統制することになる五つの帰納的原理の大枠を提示する。
1934 年 カール・ポパーが、科学的方法を定義するのは帰納ではなく反証だと述べる。

知は力だ

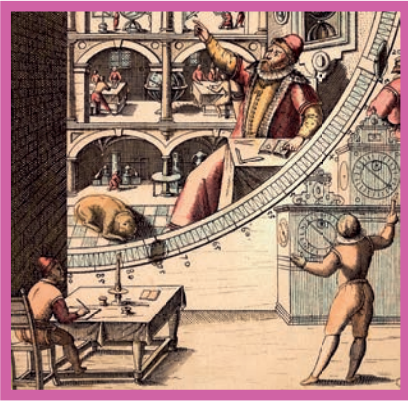
フランシス・ベーコン (1561 年～ 1626 年)

ベーコンはしばしば、イギリス経験主義として知られる思想の伝統のトップバッターに位置づけられる。この思想は、いっさいの知はつまるところ感覚経験からくるにちがいないという見解によって特徴づけられる。ベーコンが生まれた時代は、古代世界の達成の再発見に関心が集中していたルネサンスから、知にたいするいっそう科学的なアプローチへ向かう転換期に当たっていた。当時すでに、天文学者ニコラウス・コペルニクスや解剖学者アンドレアス・ヴェサリウスといったルネサンスの科学者たちによる革新的な業績はあったが、科学革命とも呼ばれるこの新しい時代には、そのほかにも眼を醒らすほどの数の科学思想家が出現した。そのなかには、ガリレオ・ガリレイやウィリアム・ハーヴェー、ロバート・ボイルやロバート・フック、そしてアイザック・ニュートンらがふくまれる。

教会は、中世の大半をつうじて広く科学を受けいれる姿勢を示していたが、その流れは、ルネサンスをつうじてヴァチカンの権威に対立する機運が高まったことによって待ったをかけられた。マルティン・ルターに代表される宗教改革に携わった人びとは、聖書を土台にした世界の説明にたいする科学のがわからの挑戦に教会が反撃するのを怠ってきた点に不満を漏らした。それにたいして、ルターによって提案されたキリスト教の新しいスタイルにすでにかのりの信奉者たちを奪われていたカトリッ



参照 アリストテレス 56 ～ 63 頁 ■ デイヴィド・ヒューム 148 ～ 53 頁 ■ ジョン・スチュアート・ミル 190 ～ 93 頁 ■ カール・ポパー 262 ～ 65 頁 ■ ロバート・グロステスト 339 頁



宗教とちがって科学は、16 世紀以来知識への鍵とみなされるようになってゆく。この版画は、デンマークの天文学者ティコ・ブラーエ (1546 ～ 1601 年) の天文台を描いたものだ。

クの教会は、それまでのスタンスを変えて、科学の努力に対立的な姿勢を採るようになった。キリスト教の新旧両面からのこうした抵抗の結果、科学の発展は阻害されることとなった。

ベーコンは、キリスト教教会の教えを受けいれるべきだと主張する。だがベーコンは、科学は宗教から分離されるべきだとも主張する。両者の分離によってこそ、知識の獲得がより迅速かつ容易になり、その知識を人びとの生活の質の向上のために活用することも可能になる。ベーコンは、科学が変換という役割をになう点を強調する。彼が漏らす不満のひとつは、科学のもっている人間生活を高める力がこれまで無視されて、もっぱら科学のもたらす学問的あるいは個人的な栄光にのみ焦点が当てられてきたことだ。

ベーコンは、科学的知識の追究にとっての心理的障害——それらは、総称して「精神の偶像(イドラ)」と呼ばれる——のリストを提示する。具体的には、まず第一に、種(ないし「類」)としての人間に共通に認められる誤った傾向を意味する「種のイドラ」、第二に、自然が本当のところどうなっているのかを観察する代わりに先入見を自然に課してしまう人間の傾向を意味する

「洞窟のイドラ」、第三に、自分たちの社会的慣習でもって経験を歪めてしまう傾向を意味する「市場のイドラ」、第四に、流布している哲学的・科学的見解がもたらす歪んだ影響を意味する「劇場のイドラ」の四つがある。ベーコンに言わせれば、科学者は、世界についての知識を得るにはこうした障害をあらかじめ克服しておく必要がある。

科学的方法

ベーコンはさらにつづけて、科学の進歩は、一般性をもった法則を明確にして、その度合いを高めてゆくことにもとづいて可能になると主張する。彼が提起する科学的方法には、このアプローチのヴァリエーションがふくまれる。一連の観察をおこなう——たとえば、鉄が熱せられて膨張する事例を観察し、ついであらゆる鉄の膨張の原因は熱だと結論する——代わりに、ベーコンが強調するのは、否定的な事例——たとえば、熱せられても膨張しない鉄の事例——を探しつづけることで、新しい理論をテストする必要性だ。

ベーコンからの影響として、科学における現場での実験への関心の高まりが指摘できる。だがベーコンは、あらゆる科学の進展を可能にする想像的な飛躍の価値を認めなかった点で、のちに批判された。■

“

なんといっても最上の証明は経験だ

フランシス・ベーコン

”



フランシス・ベーコン

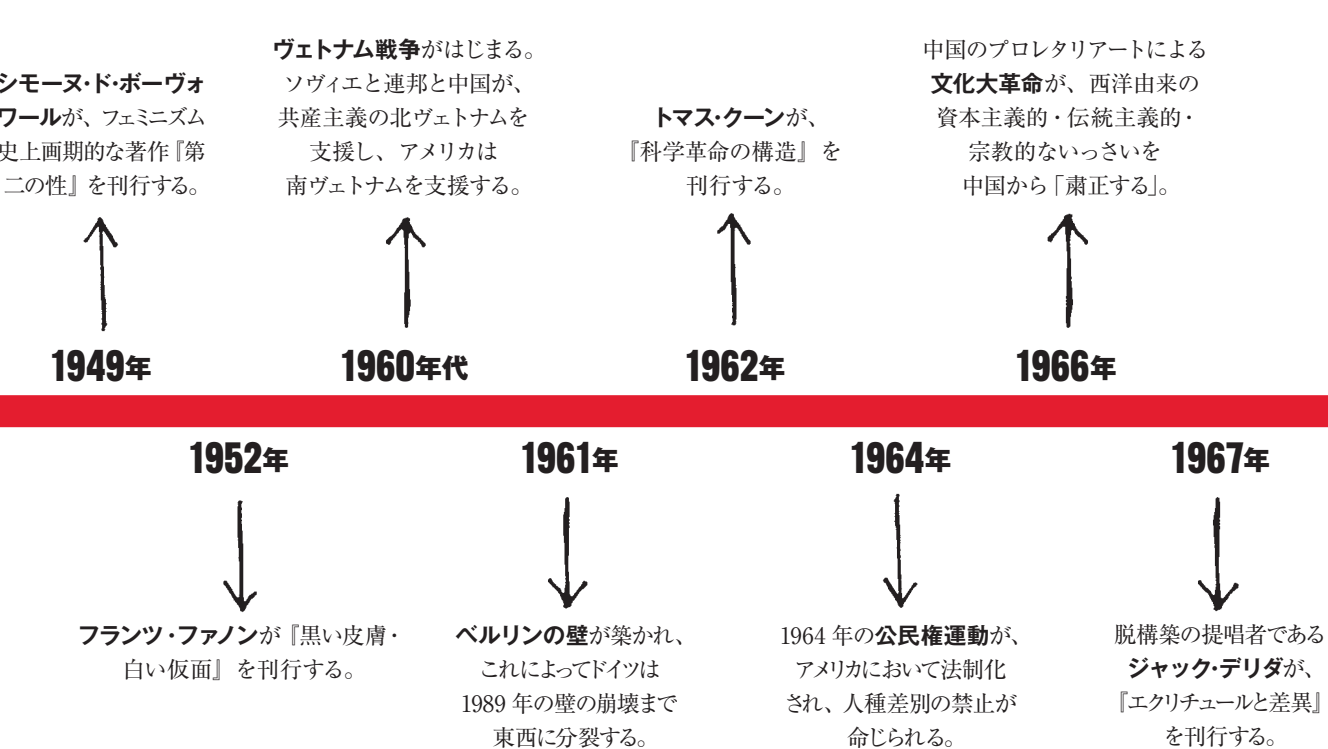
フランシス・ベーコンはロンドンに生まれ、12 歳でトリニティ・カレッジに入学するまでは家庭教師に学んだ。卒業後は法律を学ぶが、途中で放棄して、フランスで外交官の地位に就く。1579 年に父が亡くなった後、生活に困り、あらためて法律の専門家の道にもどる。

1584 年に議員に選出されるが、のちに反逆を起こすエセックス伯との交友のために、1603 年のジェームズ 1 世の王位継承までは政治の仕事から遠ざかる。1618 年に大法官に任ぜられるが、2 年後には賄賂を受けとったかどで有罪となり、辞職する。

その後の人生をベーコンは、科学にかんする著作の執筆と実験に費やす。食糧貯蔵の実験の一環として、鶏に雪を詰めていたときに気管支炎にかかり、それがもとで亡くなった。

主著

- 1597 年 『エッセイ』
- 1605 年 『学問の進歩』
- 1620 年 『ノヴム・オルガヌム (新しい道具)』
- 1627 年 『ニュー・アトランティス』



20世紀を締めくくる数十年は、テクノロジーの進歩の加速と、それに引きつづいて実現したあらゆる種類のコミュニケーション手段の進歩によって特記される。とりわけテレビに代表されるマスメディアの力は増大の一途だが、その背景には、第二次世界大戦終結以降になって顕著となった、反体制の理念と結びついた大衆文化の興隆およびそれに刺激されて登場した政治的・社会的変化が指摘できる。1960年代以降、欧米でも旧来の秩序に疑問が投げかけられ、そのひずみは東欧諸国においてしだいに増していった。

1980年代になって冷戦も終結に近づき、1989年のベルリンの壁崩壊が、新しい時代への希望をもたらした。だが、1990年代は、民族的・宗教的な動揺が高まり、ついには、新たな世紀のはじまりの時点で、アメリカでは「テロとの戦争」

が宣言されるにいたった。

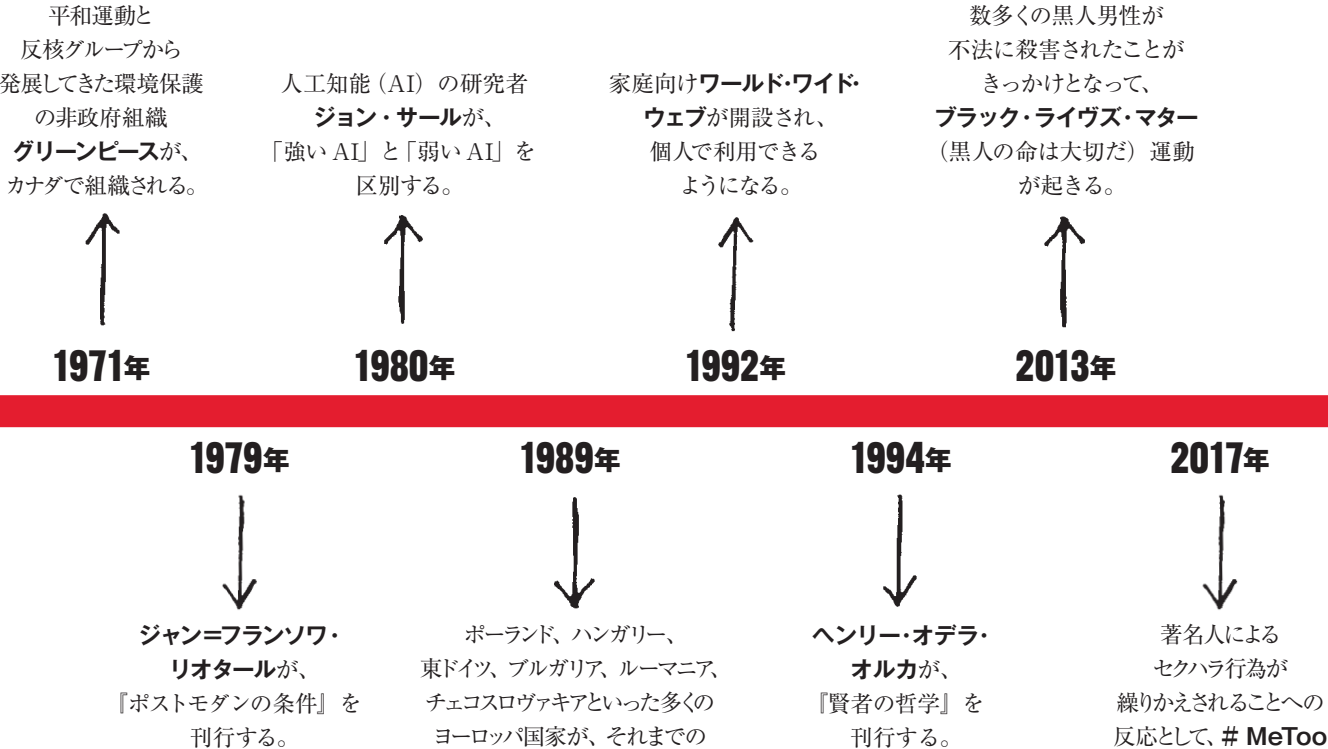
エリート意識をもった哲学

西洋文化も、同じように重大な変化をこうむった。1960年代以降、知的前衛が一般受けを放棄してからというもの、大衆文化と「高尚」文化とのギャップは広がる一方だった。哲学も、とりわけジャン＝ポール・サルトルの死以降、それに似たエリート化の道を歩みはじめた。1960年代の知識人たちには大受けだったサルトルのマルクス主義的実存主義も、いまやほとんど耳目を集めなくなってしまった。

1970年～80年代の大陸側の哲学は、構造主義一色だったが、これは文学を土台にしたフランス哲学から成長した運動であった。その中心にあったのが、「脱構築」という概念で、これはテキストを「脱構築」して、複数の相矛盾する意味をはらんだ内在的不均衡の状態へ

それをさしもどそうとするものだ。この理論の主たる提唱者であったルイ・アルチュセールやジャック・デリダ、ミシェル・フーコーといったフランスの理論家たちは、みずからのテキスト分析を左派よりの政治活動に結びつけたが、その一方で、ジャック・ラカンのような分析家は構造主義に精神分析的な展望を導入した。彼らの着想はすぐに、「ポストモダニズム」という旗じるしのもとに活動をはじめた著述家や芸術家たちの世代に採りあげられた。この旗じるしは、単一で客観的な真理や観点あるいは語法といったものがもちうる実現可能性を拒絶するものであった。

構造主義が哲学にもたらした寄与は、英語圏の哲学者たちに熱狂的に受け入れられたわけではなかった。彼らは、構造主義の業績を基本的には疑いの眼で見えており、大多数の者は嘲笑していた。言語分析という哲学の伝統のなかでは、



大陸側の構造主義は、文学に根をもった難解な文体で書かれたものが少なくなかったにせよ、つまるところ事態を単純化しすぎていると思われていたのだ。

哲学者たち相互のこうした立場のちがいが、当時の大衆文化に影響をもたらすことはなかった。おそらくその理由は、ポストモダニズムの大半が、一般大衆には理解不能のものであったからだ。ポストモダニズムのもっとも典型的な表現スタイルは、ポストモダニズムの芸術だろうが、それはきわめて抽象度が高く、知的エリートによる解説を参照しないことには理解できないものが少なくなかった。それは、あえて広く大衆から評価される可能性を締めだしているかのようであり、専門的な大学人か芸術家にしか鑑賞できず、ほとんどの人びとが暮らしている世界から隔絶した抽象哲学扱いをされるようになっていった。大衆が哲学に期待して

いたのは、企業や政府にたいしてと同様、もっと地に足の着いた導きであった。

ずっと実用的なアプローチ

ポストモダニズムの哲学が、大衆に浸透しなかったにしても、人びとの日常生活にずっとかかわりの深い、喫緊の社会的・政治的・倫理的諸問題を探りあげた哲学者もいた。フランツ・ファノンに代表されるポストコロニアル時代のアフリカ出身の哲学者は、人種やアイデンティティー、それに自由を闘争に付きものの諸問題の検討に邁進した。ヘンリー・オデラ・オルカのようなそのあとを継いだ思想家は、哲学そのものを統べている規範や哲学になが算入されるべきかといった問題を問うことで、アフリカ哲学の新しい歴史を積みあげる役割を果たした。

エレヌ・シクスーやリュス・イリグライといったフランスの哲学者は、シモーヌ・

ド・ボーヴォワールの実存主義的フェミニズムの哲学に、ポストモダンのパースペクティヴを付けくわえた。だが、そのほかの哲学者たちはポストモダニズムを脇へ放置した。抽象概念よりも、正義や道徳性といった実践的な主題に関心を向ける哲学者が増えた。ジョン・ロールズとユルゲン・ハーバーマスは、どうすれば社会がもっとよく組織化できるかを探求した。ベル・フックスは、さまざまな抑圧の形式——人種やジェンダー、性的指向にもとづく——を、支配的な家父長制度的資本主義に結びつけた。他方で、フィリップ・フットとバーナード・ウィリアムズは、現代倫理学の諸前提に挑戦した。

その間にも、トマス・ネーゲルとダニエル・デネットが人間意識を探索するなかで、人工知能科学の急速な進歩の結果、「機械に思考は可能か」という問いがあらためて脚光を浴びることとなった。■



その哲学的背景

部門
倫理学

手法
帰結主義

前史
1780 年 ジェレミー・ベンサム
の功利主義が、最大多数の最大幸福を
帰結するような行為を支持する。
1785 年 イマヌエル・カントが、自
身の義務論的道德哲学の土台をな
す定言命法を定式化する。
1859 年 ジョン・スチュアート・ミ
ルが、個人の行為への制限が許さ
れるのは、それが他人に危害を及ぼ
すのを防ぐためのときだけだという
危害原理を提唱する。

後史
1976 年 ジュディス・ジャーヴィス・
トムソンが、トロッコ問題についての
さまざまな反応を引き出す可能性の
あるいくつかのヴァリエーションを提
起する。

できることをしないでいるのを
正当化するよりも、
なにかをしてしまうのを
正当化するほうが難しい

フィリップ・フット
(1920 年～ 2010 年)

帰結主義——行為の道德性は帰結から評価されるという思想——は、ルネサンス以降の道德哲学者たちの支持を集めた。カントとその後継者たちのように、私たちがしたがう義務を負う道德規則が存在すると主張した人びとがいた一方で、行為の帰結に基礎を置くベンサムの功利主義概念に熱狂的に賛意を唱える人びともいた。

核となる原理は、ある行為が道德的に正当化されるのは、その行為が最大多数の最大幸福をもたらすときだというものだ。ベンサムの「快樂計算」を改変し、道德性に到達するための準数学的な方法ももたらされた。だが、のちの時代に示された懷疑からもわかるように、事態はそれほど単純ではなかった。

1967 年に、イギリスの哲学者フィリップ・フットが功利主義の考えかたをテストする一連の思考実験を公表した。その



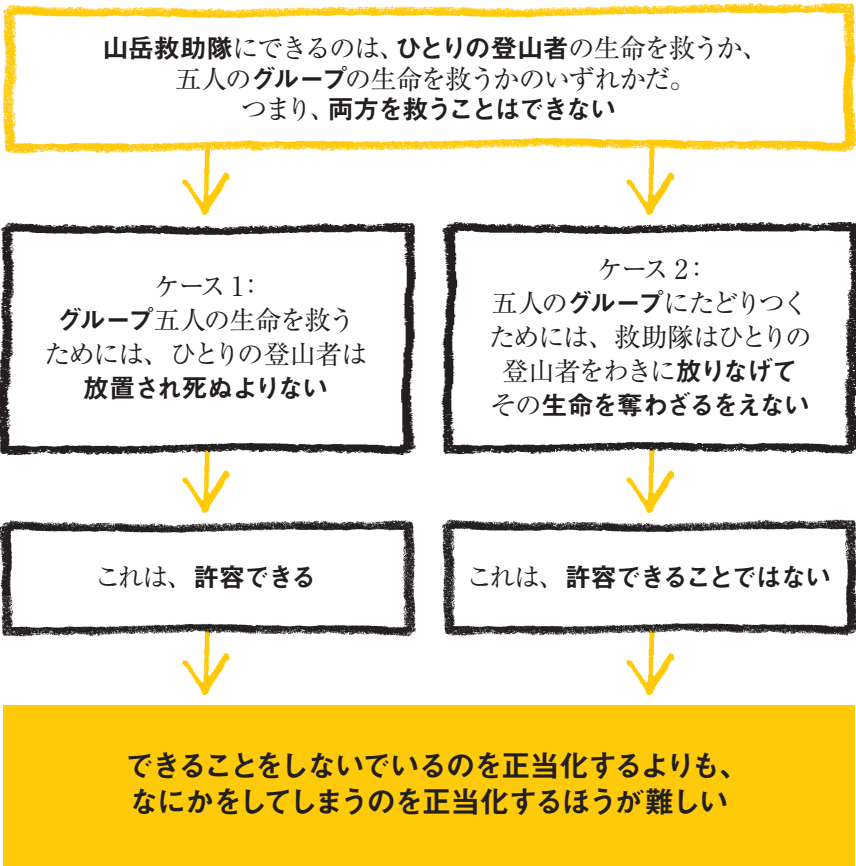
「トロッコ問題」で問われるのは、より多くの生命を救うために能動的に介入するのは、それによって直接にほかのだれかひとりの死が帰結するとしても、道德的にはよりよいことなのかどうかだ。

ひとつでフットは、五人の末期患者がいて、その一人ひとりが異なる臓器を必要としているという事態を想定する。そのばあい、五人の生命を救う臓器を得るために、ひとりの健常者の生命を奪うことは道德的に許せるだろうか。

フットは、のちに「トロッコ問題」として知られる別の思考実験をこれに対置する。制御不能になったトロッコが線路を爆走してくるが、止めるすべがない。このままでは線路修理中の五人の労働者がはねられ死ぬ。トロッコを別の線路に切りかえることはできるが、そうするとそちらで作業している別のひとりが死ぬ。道德的によりよい選択はなんだろうか。

二つの問題は基本的には同じで、五人を救うためにひとりが犠牲にされる。だが、私たちが本能的に出す解答は一致しない。どちらのばあいでも功利主義的な解答は明白だ。だが、トロッコを迂回

参照 ニコロ・マキャヴェリ 102 ～ 07 頁 ■ イマヌエル・カント 164 ～ 71 頁 ■
ジェレミー・ベンサム 174 頁 ■ フリードリヒ・ニーチェ 214 ～ 21 頁 ■ ジュディス・ジャーヴィス・
トムソン 345 頁



させるのは許容できても、だれかを臓器のために死なせるのは、それで多数の生命が救われるとしても、受け入れがたいという現実が立ちほだかる。

この実験が引き金となって多くの道德哲学者が論争を繰りひろげたが、そのひとりに「トロッコ問題」という呼び名を考案したジュディス・ジャーヴィス・トムソンがいる。トムソンは、フットの思考実験のいくつかのヴァリエーションを検討するなかで、運転手の代わりに、制御不能のトロッコの軌道をスイッチの操作で変えられる傍観者を置くことを提案した。この傍観者には2つの選択肢がある。①なにもせず、すべてをそのまま任せ、五人の生命が奪われるがまにする。

②なにもしなければ生きのこったはずのひとりに干渉し、彼の死を招く。また別のヴァリエーションで、トムソンは、傍観者が太った人物をひとり線路に放りなげてトロッコを止めて、その人物は死ぬが四人は救われるという可能性を、さらにはひとりで作業している人間が傍観者の友人もしくは身内である、あるいは悪名高い犯罪者ないし高名な慈善家であるとして、ジレンマの尺度をあれこれとずらしている。

人数を重視する功利主義的な考えかたに疑いを投げかけることで、フットとトムソンは、故意になにかを生じさせることとできごとを成りゆきに任せることとは明白な道德的差異が存在すると主張した。■

現代哲学 309

フィリップ・フット

1920 年に、イギリスのオーストン・フェリーに生まれたフィリップ・フットは、キャプテン・ボーザンケトとエスター・クリーヴランド（彼女の母方の祖父はアメリカ合衆国大統領を務めたグロバー・クリーヴランド）の娘だ。父が製鋼所を営んでいたノース・ヨークシャーで育ったフットは、女性家庭教師から個人的に教育を受けていたが、当時は同じ年代の女子生徒が高等教育を受けることは当然視されていなかった。そんななかで、フットはオクスフォード大学のサマーヴィル・カレッジに進学して、哲学と政治学、それに経済学を学び、1942 年に学位を取得した。

第二次世界大戦中はロンドンで仕事につき、そののち歴史家のマイケル・リチャード・ダニエル・フットと結婚した。フェローとしてサマーヴィルにもどり、1969 年まで在籍する。客員教授としてさまざまな職務をつとめ、その後カリフォルニア大学ロサンゼルス校に落ちついた。1991 年に職を辞してからは、オクスフォードにもどり、その地で 90 歳の誕生日に生涯を閉じた。

主著

1978 年『徳と悪徳ならびに道德哲学におけるそのほかの試論』

2001 年『人間にとって善とは何か——徳倫理学入門』

2002 年『モラル・ジレンマ——道德哲学におけるそのほかの主題』